
編集後記

東京大学経済学部は2019年に創立百周年を迎えた。日本初の経済学部が1919年に東京帝国大学と京都帝国大学に設置されたのである。ただし、授業科目としての経済学は、1877年の帝国大学開学当初から文学部に置かれていた。1879年には文学部第一科は「哲学政治学及理財学科」と改称され、経済学は理財学という名称で専攻の一つとなったのである。

この日本における経済学の草創期ともいえる時期に、理財学（ポリティカル・エコノミー）の講義を担当したのは、アメリカ人教師フェノロサ（Ernest F. Fenollosa, 1853-1908）であった。

フェノロサは、一般には日本の美術や文化財を世界に広め、また日本の文化財行政に果たした役割が大きいことで知られている。しかし、彼が東京大学において、哲学や社会学、理財学、政治学などを講じ、その講筵に列した若き日本の知識人が多く存在したことを忘れてはならない。

さて、最近当室所蔵資料からフェノロサの哲学と論理学の講義を学生が聞き取った筆記ノートが発見された。しかも、ノートを書いた学生は、後に経済学部の初代学部長となる金井延であった。本号では富善一敏氏の手でその資料的背景の解説と、ノートの翻刻がなされている。理財学の講義ノートでないのは経済学部に籍をおく身としては幾分残念であるものの、フェノロサに関する新発見資料であり、本学開学5年目の授業の様子を再現する貴重な資料である。

さて、1900年には高野岩三郎講師の尽力で、エンゲル係数で有名な統計学者、エルンスト・エンゲル（Ernst Engel, 1821-1896）の旧蔵書14,000冊が購入され、法科大学内にこれを管理する組織として経済統計研究室が設置される。これが

経済学図書館の淵源であり創設の時だとみなすならば、2020年は経済学図書館創立120年ということになる。

経済統計研究室が輸入洋書を通じた、研究成果の情報収集の窓口である一方で、国内の企業に関する一次資料を蒐集する組織も整備された。これが1913年に法科大学内に設置された商業資料文庫である。当室はこの商業資料文庫を前身としており、3年後の2023年には創立110年を迎えることになる。

1919年の経済学部創設の翌年、経済学の祖とも言われるアダム・スミス(Adam Smith, 1723-90)の旧蔵のうち300冊余りが、ロンドンで売りに出された。渡欧中の新渡戸稲造教授がこれを購入し、経済学部創立記念に寄贈し、アダム・スミス文庫と名付けられた。つまり2020年はアダム・スミス文庫が到来して100年の節目となる。

本号の特集「修復痕から製本を読み解く」は、アダム・スミス文庫や明治期の学術を支えた洋書に関する、森脇優紀氏を代表とする科研費における共同研究の成果である。

このほか、本号では当室のスタッフが関わる科研費の成果、さらに当室所蔵資料や寄託資料の資料紹介などを掲載している。経済学図書館にとって節目となる年の初めに、多くの成果を発信できることは望外の喜びである。執筆者各位にこの場を借りて御礼申し上げます。

今年度末をもって当室の第4代室長であった佐口和郎教授が定年退職を迎えられる。先生には、資料室の基盤を作る時代に、持ち前の調整能力により、資料室の危機をいくつも救っていただいた。室員一同心より感謝申し上げますとともに、先生の今後のご健康と研究のさらなる進展をお祈りしたい。(小島浩之)